
若き作家の憂鬱

花咲 甲二郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若き作家の憂鬱

【Nコード】

N0042B

【作者名】

花咲 甲二郎

【あらすじ】

小説家を目指す男子中学生。新人賞受賞の兄を持つ。週に一度の兄による熱血指導が始まった。ショートショート。

「出だしの三行が全てだよ」
ネット上に小説を公開しようとした僕に彼はポツリと言った。つまりこれでは駄目だと言いたいのか。液晶画面で読む小説は目に悪い。長い時間をかけて読むには辛い。単行本なら本の厚さを確認してそれに合わせて読み始める。仮に出だしがまったりとした文体でも後半の盛り上がり期待できる。液晶画面ではそうはいかない。三行読んで入りこめなければ戻るボタンをクリックしてしまう。

液晶画面用にプロローグを書き直そう。

はっとした。こんな筈ではなかった。良子は思った。私が浮気だなんて・・・。言葉にできない気持ちが湧きあがった。夫にあ@尾s

腕を捕まれた。

「ちよつと、何するのさ」

「お前さ、言葉にできないとか書くなよ。小説家失格。」
厳しい彼は僕の兄。去年、新人賞を取った兄は小説を書くことを僕に進めた、違う、薦めた、ん？勧めた。週に一度文章を批評してくれる。ありがたいことだ。でも性描写まで見るなよ。恥ずかしいだろ。でも言えない。兄は喧嘩が強くて反抗できない。僕は弟ではなく兄の下僕だと思う。まさか僕を育成してゴーストライターにする気じゃないだろうな。この予想が的中するのは三年後だが今の僕には知る術はない。また書き直した。

良子はイッた。

「パシッ」

口語体は入れるなと頭を軽く叩かれた。目が痛いと言つて兄に言うとなウ入を動かして背景色を灰色に変えてくれた。だいぶ楽になった。

議論した。僕は良子を恥じらいの残る乙女の心を持った中年だから柔らかい文章にしたかった。兄は良子を痴女だと言った。女の性をわかりやすい言葉で説明してくれた。感度は男の二倍以上あるらしい。童貞の僕には刺激が強い。兄はすごいな。何でも知っている。説明もうまい。憎たらしいところもあるが尊敬している。兄のような男になりたい。でもやっぱり憎たらしい。

「手本を見せてください、師匠。」

思い切つて言つてみた。右手を出してきたので僕は五百円玉を乗せた。鼻で笑つたが一行だけだと言つてキーボードに触れた。兄は人差し指だけで打つ。これで長文も書けるのが信じられない。

すでに濡れていた。皮膚が泡立ち芯が溶ける。良子は恍惚の表情で叫んだ。「カミーン！」

勃起した。読めない漢字があつた。じゅれていたらと読むのだろうか。でも伝わつた。とてつもない圧力を感じた。助詞連続への疑問はその圧力によつて強引になぎ倒された。芯つてなんだろう。兄は女性器の上部にあるものを芯という言葉で比喩したと教えてくれた。知らないがすごいことを教えてもらったような気がした。僕の内部にある箍が外れた。解放。自由。アナーキー。頭の中を多数の単語が駆け巡つた。兄の顔も紅潮していた。それから一時間以上も議論し、また書き直した。三行の重みを教えてくれた兄はやはりすごい。良子の性格が統一していないのに気がついたのは日出國に旭日が昇天

した時であった。

母はドアの前で動けなかった。盆の上にある熱い紅茶が冷えるまで。重いのはこの扉だわ。思いのほか重いわ。そう心の中でつぶやいた母は足音を消して台所へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0042b/>

若き作家の憂鬱

2010年12月13日18時30分発行